

武蔵野日曜集会

第二の徴

――ヨハネ伝第4章39～54節――

1984年3月25日

小池辰雄

これは真に世の救主なり みんな今化する 「参りました!」というのが本当の信仰 第二の徴は遠隔祈祷 軍人の信仰 キリストは十字架と聖霊を通して私を愛してくださった 原始の福音の世界に立ち帰れ 祈りは根源の現実では成っている 徴を通してキリストという徴の中に入る 第三の徴は我々がキリストの徴になること

【ヨハネ4・39～54】

39 此の町の多くのサマリヤ人、女の『わが為しし事をことごとく告げし』と証したる言によりてイエスを信じたり。40 斯てサマリヤ人、御許にきたりて此の町に留らんことを請いたれば、此処に二日とどまり給う。41 御言によりて猶もおおくの人、信じたり。42 かくて女に言う『今われらの信ずるは汝のかたる言によるにあらず、親しく聴きて、これは真に世の救主なりと知りたる故なり』

43 二日の後イエスここを去りてガリラヤに往き給う。44 イエス自ら証して預言者は己が郷にて尊ばるる事なしと言ひ給えり。45 斯てガリラヤに往き給えば、ガリラヤ人これを迎えたり。前に彼らも祭に上り、その祭の時にエルサレムにて行ひ給ひし事を見たる故なり。

46 イエス復ガリラヤのカナに往き給う、ここは前に水を葡萄酒になし給ひし処なり。時に王の近臣あり、その子カペナウムにて病みいたれば、47 イエスのユダヤよりガリラヤに來り給えるを聞き、御許にゆきてカペナウムに下り、その子を医し給わんことを請う、子は死ぬばかりなりしなり。48 ここにイエス言ひ給う『なんじら徴と不思議とを見ずば、信ぜじ』49 近臣いう『主よ、わが子の死なぬ間にくだり給え』50 イエス言ひ給う『かえれ、汝の子は生くるなり』彼はイエスの言ひ給ひしことを信じて帰りしが、51 下る途中、僕どもも往き遇いて、その子の生きたることを告ぐ。52 その癒えはじめし時を問ひしに『昨日の第七時に熱去れり』という。53 父その時の、イエスが『なんじの子は生くるなり』と言ひ給ひし時と同じきを知り、而して己も家の者もみな信じたり。54 是はイエス、ユダヤよりガリラヤに往きて為し給える第二の



徴なり。

●これは真に世の救主なり

39 此の町の多くのサマリヤ人、女の『わが為しし事をことごとく告げし』と証したる言によりてイエスを信じたり。

サマリヤの町へ女が、

「キリストが、預言者が来た。来てごらんなさい」

と言つて出掛けて行つたわけです。こういうわけだと言つて話をしたんでしよう。それで、大変なひとだと言つて信じたという。

40 斯てサマリヤ人、御許にきたりて此の町に留らんことを請いたれば、

えらく感動してしまつてゐるわけです。

「お泊まりください」

と。キリストはそこに二日泊まつたと書いてある。大変楽しいお話です。もともと仲の悪いユダヤ人とサマリヤ人の間ですけれども。そういった伝統的ないがみ合いだとか、国境とか、民族的な相違だとか、そんなものをキリストは乗り越えてしまうわけです。

超イデオロギーの世界ですから、この福音の世界は。イデオロギーをやっているうちは、いつまでたつても始まらない。イデオロギーにはそれぞれの意味があります。役割もあります。価値もあります。けれども、それにこだわつたら、みなダメになつてくる。

柳宗悦も言つてますけれども、

「いわゆる分別の世界を――相対的ないろんな比較研究、どうだこうだと品定めする、そういう世界はまだ本当の世界ではない――それをもうひとつ越えなくては
いかん」

ということを言っている。宗悦さんはなかなか素晴らしい感覚の人です。全くその通りです。ただ、キリストが一つ例外なことを仰つた。それは、

「聖霊に逆らう者は赦されないぞ」

と、このことです。だから、キリストがいかに聖霊を重んぜられたかと。ところが、聖霊に逆らつてゐるクリスチャンがたくさんいる。

キリストは、そういうわけで、サマリヤの人たちが「お泊まりください」と言つたので、喜んで二日とどまられた。

此処に二日とどまり給う。41 御言によりて猶もおおくの人、信じたり。

今度は、直接にキリストが語りますから、これにももちろん参つてしまつたわけですよ。

私は今日この集會が始まる前に、マタイ伝とマルコ伝を全部通読した。まあそれは知っているから、読み方は早い。時々ぐーつと通読するととてもいいものだね。ああこういうようにキリストはやむにやまれずしてなされた、言われた。それはいかに自然か。実に傑



作ですね、この福音書というものは。これは文学的に言っても大変なものだな。

42 かくて女に言う『今われらの信ずるは汝のかたる言によるにあらず、私たちサマリヤ人が信ずるのは、あんたが言った言葉によるのではない。』

親しく聴きて、これは真に世の救主なりと知りたる故なり』

語ったので一応信じたんだが、現物にキリストにでつくわしたら、いやこれは大変な人だ。お前が取り次いでくれたのはありがたいけれども、信じたのは本当に、

「これは真に世の救主なり」

とまで言ったです、これはメシヤだと。サマリヤ人がキリストのことをメシヤだと言ったわけです。これは大変な告白です。親しく聴きて、じかじかにキリストに聴いたら、

「これは本当に救主だということが分かったから、それでもう信ぜざるを得ないわけだ」

と。聖書でも特にキリストの言葉だけを別な色で刷ってある聖書もあります。そうすると、サーツとそのキリストの言葉が光って見えてくる。これは本当に、

「わが言は靈なり、生命なり」

です。絶対に意味ではない。「意味がどうだ」なんて言って詮索しているうちは絶対に分かん。もう直にその言葉を受けとって、その現実に入らないと。

サマリヤ人たちが、

「世の救い主だ」

と告白したんですよ。他にどこかにありますか、そういうのは。

「汝はキリストなり」

とペテロが一遍言いました。けれども、このサマリヤ人は驚くべきものだね。だから、キリストが譬話で、「善きサマリヤ人」なんていうサマリヤ人の話が自然に出てこられたのではないかと思えます。

●みんな今化する

43 二日の後イエスここを去りてガリラヤに往き給う。

ずっと北の方のガリラヤに行かれたわけだ。今、エルサレムから北に向かっている旅ですから。

44 イエス自ら証して預言者は己が郷にて尊ばる事なしと言ひ給えり。

この場合はユダヤの方のこと。しかし、ナザレにいたときもキリストはダメなんだ。ナザレから出てガリラヤのカペルナウムの方へ行かれた。ユダヤはダメ、むしろサマリヤ人が自分を認めたというわけです。大体、家族の者はよくわからない。キリストもそうだった。あまり親しい人はかえって分からない。灯台下暗しという。

「その家の者は敵なり」



かく、大変なひとですよ、キリストというひとは。

時に王の近臣あり、その子カペナウムにて病みいたれば、⁴⁷イエスのユダヤ

よりガリラヤに來り給えるを聞き、御許にゆきてカペナウムに下り、

「王」とはヘロデ・アンティパスです。ヘロデのいる所はエルサレムだから、この近臣はユダヤからずっとカペナウムまでやって來たんだ。大変なもんだ。

その子を医^いし給わんことを請う、子は死ぬばかりなりしなり。

もう瀕死の状態である。

⁴⁸ここにイエス言い給う『なんじら徴^{しるし}と不思議とを見ずば、信ぜじ』

相手は一人なんだけれども、みんなに向かつて言われた。よく「徴と不思議」という言い方をしている。「不思議」というのは現象的な言葉です。「徴」というのは、それも現象は現象だけれども、特に意味内容を持っている。「徴」は「セイメイオン」といつて、大事な深い字です。けれども、「徴」の本当の意味をつかみそこなっているから、そういう意味において、

「徴を求めたつてダメだ」

ということ。しかし、本当は徴なんですよ、キリスト自身^{キ、リ、ス、ト、自、身}が最大の徴^{しるし}なんだから。

水を葡萄酒に変えたのは一つの徴です。けれども、水を葡萄酒に変えるような、そういった信仰を持つているキリストという主体、それを本当に受けとるのでなければ、徴を受けとったことにならない。この福音書には、病が癒されたということがたくさん出ている。五つのパンと二つの魚から五千人が食をいただいて、しかも、パンの残りを集めたら十二の籠に満ちたなんていう、とんでもないことをされた。これは正に「不思議」だね。けれども、そういった徴と不思議の主体を受けとることが本当の信仰なんです。

⁴⁹近臣いう『主よ、わが子の死なぬ間にくだり給え』

大変なことだ。死なない間にやって来てくださいと。

⁵⁰イエス言い給う『かえれ、汝の子は生くるなり』

「私は一緒に行かないよ。帰れ。汝の子は生くるなり」

と。まあ非常に求めが切でね、キリストを本当に全面的に信じていますから、キリストは受けとられたわけだ。

彼はイエスの言い給いしことを信じて帰りしが、

「それでも来てください」とは言わなかった。

⁵¹下る途中、僕ども往き遇いて、その子の生きたることを告ぐ。

生きたと。死にそうだったのに、なぜ生きたのかと。

⁵²その癒えはじめし時を問いに『昨日の第七時に熱去れり』という。

「第七時」とは午後一時頃のことです。熱が高くて死にそうだったのが、熱が冷めた。

⁵³父その時の、イエスが『なんじの子は生くるなり』と言ひ給いし時と同じ



きを知り、而して己も家の者もみな信じたり。
これは本当にキリストは大変な方だと。

「信じたり」

というのは、別な言葉でいうと、

「参りました！」

ということだ。キリストに参ってしまった。「参る」という言葉はおもしろいね。本当に参らなければ信じたことにならない。

「まあ信じておこう」

なんていうのはちつとも信仰ではない。

「参りました！」

というのが本当の信仰なんです。「参った」ということは、自分の側を全部否定してかかっている。降参なんだから。無条件降参だ。無条件降伏すると、今度は逆に本当の証者にされる。

●第二の徴は遠隔祈祷

「負けるが勝ち」というのはそのことだ――そのことだというのは今の新しい意味ですよ――「負けるが勝ち」というのは、なにも相手に勝つのではない。本当の勝者となる。どんなことに遭っても大丈夫な人になってくる。相手は絶対者ですから。キリストは神さまの前に参っているひとだから。父の前にはキリストは本当に平伏ひれよしていた。それだから、キリストは、その父の権威と力と愛と光が――何でもい――全部来てしまった。我々はキリストに参ると、そういうことになる。キリストの証者にされるためには、キリストに参らなくてはならない。それが「信ずる」ということです。いいですね。いい気な顔して「信ずる」なんて言ったって、それはダメだよ、そんな「信ずる」は。降参しなければ。

54 是はイエス、ユダヤよりガリラヤに往きて為し給える第二の徴なり。

ガリラヤと言ったって、これはカナだよ。ガリラヤというのは広いんだから。

第一の徴は水が葡萄酒になってしまった。第二の徴は遠隔祈祷です。普通は、キリストの癒しは現実でもって手を置いたり、あるいは言葉を発したり、いろんなことをしてキリストは癒された。ところが、これは距離があるんだ。時間も空間もキリストは支配してしまふ。しかも、現在の時間ばかりでない、過去も未来もキリストは掌握してしまふ。だから、サマリヤの女は、過去がみんな見られてしまった。大変なひとですね。私みたいな者を通しても時には遠隔祈祷をさせられて、治ったりすることがある。

神さまは本当の医者なんだ。また、キリストは本当の医者なんだ。人間のすることはいろいろある。天界においてもその仕事は続くだろうけれども。医者は天国に行くと廃業してしまうよな。お医者さんは、これは地上だけで、天国に行くと医者は要らなくなる。医



者は要らないけれども、医者は今度は別な仕事をさせられる。出エジプト記15章26節に、

「²⁶言いたまわく、汝もし善く汝の神エホバの声に聴きしたが、いエホバの目に善と見ゆることを為しその誠命に耳を傾けその諸の法度を守らば我わがエジプト人に加えしところのその疾病を一つも汝に加えざるべし。そは我はエホバにして汝を癒す者なればなり」と。(出エジプト15・26)

「我はエホバにして汝を癒す者なればなり」

とある。お医者さんはお手伝いをする。いわゆる医学をする学生もこの中にいるかもしれないけれども、それはまたそれで大いに東西の新しい掌握をして、すべて創造的にならなければダメです。福音を本当に受けとつたら、すべて創造的になる。神さまは創造者だから。

●軍人の信仰

マタイ伝8章に百卒長の話があるでしょ。5節から。

「⁵イエス、カペナウムに入り給いしとき、百卒長きたり、⁶請いていう『主よ、わが僕、中風を病み、家に臥して甚く苦しめり』」

今度はキリストはさつきと違って、

⁷イエス言い給う『われ往きて医さん』

「じゃ、行つて治してやろう」と。そしたら、

⁸百卒長こたえていう『主よ、我は汝をわが屋根の下に入れ奉るに足らぬ者なり。ただ御言のみを賜え、さらば我が僕はいえん。』

「いや、いらつしやるにはおよびません」と。「ただ、御言だけください。そうしたら、癒えます」と。これはもうキリストの先をいつてしまつたんだね、この百卒長というのは。

⁹我みずから権威の下にある者なるに、我が下にまた兵卒ありて、此に「ゆけ」

と言えば行き、彼に「きたれ」と言えば来り、わが僕に「これを為せ」とい

えば為すなり」

軍隊はそうです。私は陸軍にだいぶいましたから。実に彼らは命令によく従っている。それは本当に気持よかつたね、そういう点では。

「はいっ！」

と返事がハッキリしているし。軍隊は特にそういう訓練をさせるんだけれども。今の若い人たちが本当にハッキリと「はい」も言わなければ、しょうがないものだな。なにももう一遍、軍隊教育をしろとは言わないけれども、ある期間にピシヤツと鍛えることをしなくてはいかんと思う。パチンコやつたり、マンガ見たり、もうおかしなことになつてしまった。日本みたいにパチンコの多い所はないんじゃないかな。パチンコ亡国だ。

「往けと言えば往くし、来れと言えば来る。そのようなわけでありますので、あなたが仰つてくだされば、それで結構なんです」



と。キリストが仰れば、もうそれで治るとハッキリ信じている。キリストはこれを聞いて、
10 イエス聞きて怪しみ、

という。いや、驚いたんだ、キリストは。

従える人々に言い給う『まことに汝らに告ぐ、斯る篤き信仰はイスラエルの

中の一人にだに見しことなし。

この百卒長というのはローマ人だよ。イスラエルにいないじゃないか、ローマの兵隊の方がよほど信仰がしつかりしていると。

ヒルティが軍人の信仰を非常にたたえているところがある。ゴルドン將軍です。軍人というのは非常にそういうところがピシャツとしていて、信仰の展開が素晴らしい。

「天皇陛下の命令ならば水火を辞さない」

というような、そういう気持があったんだよ、昔ね。日本の軍隊がなぜ強いかというと、そういう気合だったから。絶対的だったからね。それは軍隊にも非難すべき面もありましたけれども。やたらに引っぱたいてみたりね、ことに下士官というのはよくない。ちよつと上のやつが下のやつをこき使ったりする。ああいうことは善くない。本当にわきまえのある将校はそんなことはしない。

「こんな篤い信仰はイスラエルの中の一人にもいない」

と。キリストに「然り」と。これは自分に対する「否」です。さっきの、キリストに対して「然り」というのは本当に降参している。そういう気合で聖書の中に入って行きなさいよ。本当に力が来るんだから。これはキリストが怪しんでしまった。

11 又なんじらに告ぐ、多くの人、東より西より来り、アブラハム、イサク、ヤコブとともに天国の宴につき、¹² 御国の子らは外の暗に逐い出され、そこにて哀哭・齒嚙することあらん』

「俺たちは選民だ」

と言って、単に伝統や血筋を誇っているやつらは外に出されてしまう。ところが、

「異国のいろんな、名もない、また人にけなされているような人たち、それが逆に

天国に入るぞ」

と。

13 イエス百卒長に『ゆけ、汝の信ずることく汝になれ』と言ひ給えば、このとき僕いえたり。」(マタイ8:5～13)

キリストが百卒長のこの気合に感激され、それからカナンの女の信仰にも感激された。

「犬はテーブルから落ちるパンくずを食べておりますが、私はそのパンくずで

結構です」

なんて言ったら、キリストは参ってしまったわけだ。それでカナンの女の子供もすぐに癒されてしまった。あの百卒長とこのカナンの女の子の癒しが正に即刻です。まだ他にあ



ったかもしれないけれども。時間・空間を超越して、信仰の現実はそのように電光石火です。霊波が飛ぶんだよ、霊の波動が。念波というのものもあるけれども。

●キリストは十字架と聖霊を通して私を愛してください

私は日曜を、とにかく1940年からもう44年間こうしてやっている。夏は休み時もあるけれども。この夏はひよつとしたら、8月は完全に休むかもしれない。けれども、毎回新しく進んで行く。ひとつもマンネリにならない。むしろ聴いている方がマンネリになることがあったから、集会の解散を3回やった。よく祈ってから出てこい、一か月くらいつてからまた申し込みなさいと。昔はそんなことをやったんだよ。この頃はあなた方は解散するような状態でないからいいけれども(笑)。いい加減な気持でいたら、解散を命じてしまうから。

さつき、「聖霊に逆らう」と言ったのはマタイ伝12章のところですよ。31節から、

「31この故に汝らに告ぐ、人の凡ての罪と瀆けがれとは赦されん、されど御霊を瀆けがれすことは赦されじ。32誰にても言をもて人の子に逆う者は赦されん、

「何だ」なんて悪口言っているうちはまだ結構だけれども、

然れど言をもて聖霊に逆う者は、この世にても後の世にても赦されじ。」(マ

タイ12・31～32)

と。恐ろしいよ。ところが、聖霊に逆らうパリサイ・クリスチャンがいるんだ。困ったもんだ。聖霊に逆らう者はサタンの味方になる。

キリストは己を義としなかった。神さまだけを義としていた。キリストは無義者なんです。そうしたら、神さまから義を賜っただけのはなしです。手放して自分を義人だなんて思っていないやしない。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主たる汝の神を愛すべし。その如くまた隣人を愛すべし」

と。これは福音の中心だけれども、

「さあ、どうしてそんなに愛せるだろうか」

なんて思って、私は無教会時代にそういう言葉は困ったよな。ところが、キリストは十字架を通し、聖霊を通して、私を愛してくださいました。そのことに気がついたら、

「愛すべし」

どこのさわざぎではない。

「愛さないではいられません」

ということ。

「神さま、キリストさま、あなたを愛さないでは、私は生きてられません」

ということですよ。そうなんだ。命令だなんて思ったら、そうじゃない。愛せざるを得ない。



というのは、私はそのようにして命懸けで愛していただいているから。皆さん一人ひとりその通りです。キリストの愛にかなうものはありませんから。愛とはそのように人を救うものであり、助けるものであり、生命付けるものである。永遠の生命を与えるものである。何も心配はいらん。今、心の状態がどうだ、身体の状態がどうだと、そんなことはひとつも心配いらん、もうこのキリストに來れば。福音書は教えではないから。救いの現実ですから。

「何を遠慮しているか」
と仰るわけです。

●原始の福音の世界に立ち帰れ

そういうように、百卒長やカナンの女のように、キリストに本当に100%に「然り」と言うときには、距離の問題なしに直ちに癒されてしまう。ということは、祈りの世界は、いつも申し上げているとおり、祈り入るんですから。自分を投げ入れるんですから。帰入する。自分を投げ入れるのが本当の祈りの世界です。

そうすると、今祈ろうとしている遠隔の人――自分がキリストにならなければダメですよ、妙な言い方をすれば――

「キリストがわがうちに」「エン・クリスト」

です。キリストは今度は、「エン・エモイ」「わがうちに」と言う。その境地までハッキリと自分を入れて、本当に心の中で

「あの人を癒してください」

と祈る。それは響きます。そこに入らないで、「癒してください」ではダメですよ、まず自分がキリストの中に本当に入らなければ。それが祈りの秘訣です。そうしたら、グーッと力が来ます。そして、「何時に祈るよ」と言ったら、ハッキリとその時に響きが行きますから。もう一分でたくさんだ。30秒でもいい。瞬間です。それから、相手が全然知らなくても、そのような祈りをやっている人の祈りは、知らない間に作用するということもある。まあ自在な世界ですね、本当に。

世界はいろんな意味で行き詰まっている。もう希望がないね。一番恐ろしいのはやはり原子力です。核兵器というのは棄てようがない。うっかり棄てると、そこでまた公害現象が起きる。大変な、始末にならないものを造ったものだ。今、ソ連とアメリカが持っている量は大変な量です。本当に世界がひっくり返ってしまうんだからね。なぜ、そういうバカげたことを大変な費用を使ってやっているかというわけだ。全く救いがたいね、この人類というものは。自ら亡びを刈り取るうとしている。サミットなんてやったって、大したことはない。ソ連も一緒になって、

「もう戦争は止めよう」



と、なぜそういう結論にこないか。

「我々人類は滅亡してしまうぞ。ミサイルがいくつだのというそんな問題じゃない」

というところまで、なぜ来ないか。そこまで突き抜けたような政治家がいらないものな。政治家は大体、預言書でも読むといいんだ。イザヤ書を読めと。

もう、烈々たるものが来てしようがないよ。無教会では「内村鑑三記念講演会」なんてみんなまたやるよ。いくらでもやってください。内村先生は天界から、

「もうたくさんだ。俺なんか記念しなくていいから、キリストを語れ」

と言っておられるでしょう。この聖霊のない世界は、クリスチャンは、キリスト教は、どうしてももう一遍、我々一人びとりが本当にこの使徒の信仰に、原始の福音の世界に立ち戻らなければ。預言者も

「立ち帰れ、立ち帰れ」

と言っているんだから。そして、やってくださいよ、若い人たちは。まだ私はちょっと簡単に死ねませんけれども、君たちよりか長生きするわけではない。天界に行ったら、天界から応援する。ボヤボヤしてたら幽霊になって出てくるからね(笑)。

御霊のこの信仰にきたら、あなた方はどういう形であろうとも、福音を伝えなくては。この召団は不滅である。これは御霊の召団であるから。組織でも何でもなし。生命だから。そういう気合でやってくださいよ。だから、先のことは心配しない。

●祈りは根源の現実では成っている

ヨハネ伝14章12節、

「¹²誠にまことに汝らに告ぐ、我を信する者は我がなす業をなさん、かつ之よ

りも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。」(ヨハネ14・12)

「私を本当に受けとっていると、私と同じ業をする。いや、それよりも大きな業をするぞ。世の末までお前たちを通していいよいよ大きな業をしていくぞ」

ということだ。我々がするんじゃないんだ。

「そうですか、キリストよりか大きな業ですか」

なんて言って、自分を見たってダメだよ。

「我よりも大きな業を、今よりも大きな業をお前たちを通してやるぞ」

と。そして、世界に向かってこのキリスト教は展開していったわけです。名のある人や名のない人を通してね。本当の福音の証者を通して。福音の証者たる自覚がなかったら、クリスチャンではない。何をしてもいいから、そこで福音の光が発していないければ。千差万別でいいんです。その人らしきが出て行けばいい。

第一の徴は水が葡萄酒になった。水が酒になった。第二の徴では祈りが直ちに現実となった。第一のは物質面、第二のは霊的な面。しかし、どっちもこれは愛の力です。御霊の愛



の力です。聖霊ですから。第一と第二はただ現象面がちがうだけのはなしで、元は同じこと。酒に限らない。これは何でもいいんだ。水というのは全然、味が無い。無味なんだ。味付ける元だ。本当の味の素は水なんです。この場合はお酒になった。あるときは、味噌汁になるかもしれない。

祈りは現であるということ。現である。

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

と。これもマタイ伝に出ている。

「およそ我が名によりて祈ることは何事も成る。我に居れ、さらばすべての事は成る」

と。これもヨハネ伝14章にある。それは相対的現実では罪の現実ですから、成らないことでもありますよ。けれども、根源の現実では成っているんです。根源の現実、奥の現実では成っている。

「成らないから、私の祈りはまだ足らなかった」

なんて、そうじゃないよ。本当に祈り込んでいけば、必ずそれは成っているということ。現に信じている祈りが本当の祈りなんです。

「成るでしょうか？」

なんていうのは本当の祈りでも何でも無い。癌という病気はなかなか治らない。治らないけれども、

「治っている」

という、もうひとつ奥の世界を受けとっていかなくては。その人は死ぬかもしれないが、しかし、奥の世界で、その人に癌をも制するところの永遠の生命を祈り込むことです。

本当は、人間の罪が癌なんだ。罪は霊的な癌だ。この霊的な癌は誰も癒すことができないのを、これを癒してくださいのがキリストの十字架なんです。キリストの十字架と聖霊は一切のものを覚えていく。

「すべての不義を赦し、すべての病を癒す」

ということが詩篇103篇にある。あれが正にこれなんです。すべての病の一番の病である癌も癒してしまうし、死人まで甦らせてしまうし、一切の罪を贖ってしまったのがその十字架です。その癒す力は聖霊です。だから、私は、

「十字架と聖霊は絶対に離してはいかん」

と言っているわけです。

●徴を通してキリストという徴の中に入る

祈りが本当にそういう現の世界で、魂の呼吸である。ある特別な時間に祈るということも祈りですけども、そうでなくて、いつであろうと、電車の中であろうとどこであろうと、



もう直ちに祈りの場になる。目をつぶれば深山幽谷である。目を開けていたって祈れるよ。「祈り」という言葉がまた躓きになつては困る。

「キリストにある」

というときに一番深い祈りの世界に入ります、言葉以上の世界に。我々の肉体は空気の中にある。魂はキリストの中にある。とこういうわけだ。

「なかなか、私はキリストの中に入れないんですが」

なんて、なぜ、そんなことを言っているか。どんな状態であろうとも、必ず入れるんです。十字架という門があるんだから。無門の門があるんだから。無条件の門なんだから、十字架というのは。八方破れの姿なんです。整えようとするから、おかしなことになる。そうすると、霊的な変化がぐんぐん起きてくる。だから、ありがたいと、こういうわけです。

第一の徴、第二の徴という、この徴の持つ中身、奥の世界に――水を葡萄酒に変えたり、直ちに癒したり――そういうそのキリストの中に入る。これが本当にこの第一、第二の徴を受けとつて現実であるわけです。徴を通してキリストという徴の中に入ります、活ける徴の中に。無限無量の徴の中に。千変万化する徴の中に。まあ説明できませんね、楽しくて。だから、

「日曜日は来なさいよ」

と私は言っている。なんだかんだと言って、お客さんが来たのどうのこうのと、そんなことを言っているうちは本当の求めがないからだ。お客さんに、

「待っている。二時間ほどちよつと留守になるから」

と、それくらいの気合が出てこないかね。

「まあこれでも食べていってください。この本でも読んでいってください。でなければ、

一緒に行きましょうか」

と、それくらいの気合で、

「日曜の午前は、私はダメなんですよ」

と、なぜ言わないか。日本では、日曜に仕事をやってみたり、学校では何か催しをやってみたり。日曜ははずせと言いたいんだ。そういうことにならないから困ったものだよな。ヨーロッパはとにかく習慣的にそういうようになっている。それでも本当の意味で礼拝しているのは少ないだろうけれども。礼拝は、しかし、日曜に限らない。普段の仕事も本当の意味では礼拝である。これはパウロがちゃんと言っている。

●第三の徴は我々がキリストの徴になること

マルコ伝の最後のところ。

「¹⁴其ののち十一弟子の食しおる時に、イエス現れて、己が甦えりたるを見し者どもの言を信ぜざりしにより、其の信仰なきと、其の心の頑固かたくななるを責



め給う。¹⁵ 斯て彼らに言いたもう『全世界を巡りて凡ての造られしものに福音を宣伝えよ。¹⁶ 信じてバプテスマを受くる者は救わるべし、

もちろん、御霊のバプテスマです。

然れど信ぜぬ者は罪に定めらるべし。

これは命懸けのはなしなんだ。

¹⁷ 信する者には此等の徴、ともなわん。即ち我が名によりて悪鬼を逐いだし、新しき言を語り、¹⁸ 蛇を握るとも、毒を飲むとも、害を受けず、病める者に手をつけなば癒えん。

と。私を本当に受けとれば、そういう徴が起きるぞと。

¹⁹ 語り終えてのち、主イエスは天に挙げられ、神の右に坐し給う。²⁰ 弟子たち

出でて、遍く福音を宣伝え、主も亦ともに働き、伴うところの徴をもて、

御言を確うし給えり。」(マルコ16・14～18)

これが使徒行伝です。まあ福音書のペテロはダメだけれども、使徒行伝のペテロはガラリ変わっているでしょ。ハッキリ、御霊の力です。パウロはひっくり返されて、えらいことになったでしょ。みんな聖霊の世界です。もうペテロがそうなったこと、パウロがそうなったこと自身が、彼ら自身が本当の徴になったことだ。我々もそのようなキリストの徴にならないければ。第三の徴は、我々がキリストの徴になることです。「第三の徴」という言葉がないから、我々が第三の徴にならないければダメです。本当です、これは。終わります。

